

無題

山城28回 中村 哲也

創立百年おめでとうございます。卒業生の一人として、うれしく思います。

入学は一九七三年四月、卒業はちょうど三十年前の七六年三月です。在学中にはロッキード事件やウォーターゲート事件があり、石油危機が起きたのが一年の秋、ベトナム戦争が最終的に終結したのは三年の春のことでした。高度経済成長期に幼少期を過ごした、思春期後期の私たちの心に、そんな社会情勢はどんな影を落としたのか。受け止め方は人それぞれでしょうし、私自身の記憶もあやふやになってきていますが、学んだことがあるとすれば、「嘘については駄目だ」ということでしょうか。

ちょうど子ども世代になる今の山城高生と比べて感じるのは、私たちの在学中は、良く言えばおおらかで自由、悪く言えばハメをはずして遊びすぎだったということです。

今は三日間の日程で行われている山城祭は、文化祭と体育祭を合わせた上に、前夜祭、後夜祭も加わって、一週間にわたるお祭り騒ぎでした。怪しげだけどおいしかった模擬店メニュー、

中庭で男子が女装（その逆も）して美（？）を競ったオカマコンテスト、体育館では演劇のグランプリ、グラウンドでは縦割りクラス対抗のエール合戦、そして廃枕木を組んだファイアストームを囲んでのフォークダンス・・・。

「標準服」の規定はありましたが、大方は私服。ジーンズにスニーカーが定番でしたから、器は高校でも、中身は大学のキャンパスのような雰囲気でした。先生方に対しても、○○さんと呼ばばまだいい方で、あだ名で呼んだりちゃん付けしたり。またともに敬語を使った覚えがありませんが、年長者に対する敬意は持っていましたし、先生方も、そんな私たちに、一人の人間として温かく接して下さいました。規律が乱れていたのではなく、初めから規律などない中で、最低限の道徳は守る、社会的な常識があつたのだと思います。

一昨年夏、先生方もお招きして、卒業以来初となる、学年全体の同窓会を開催しました。右も左も懐かしい顔、顔、顔。いつの世も、誰にとつても、自分の青春に重なる時代こそが古き佳き時代なのかも知れませんが、山城高校で過ごした三年間は、何ものにも代え難い貴重な時であつたと再認識しました。

現在、娘が山城生です。四半世紀ほど後には、孫がお世話になるかも知れません。二世紀目の歴史を刻み始める母校を、陰ながら応援し続けたいと思っています。